

美人三姉妹の人間狩り シナリオ・ヴァージョン

登場人物

高宮亜衣子 23歳。長女。大手商社社長秘書。妖艶な美女

高宮亜季子 大学一年生。次女。清楚で端正な美少女

高宮亜沙子 高校二年生。三女。スポーティで活発な美少女

安藤 大学三年生。漫画研究会部長。小男

矢代 大学三年生。漫画研究会副部長。長髪の色白。無口

井上 大学二年生。漫画研究会部員。プロの漫画家を目指す。

彰一 大学一年生。漫画研究会部員。陽気なおっちょこちよい。

英介 物語の語り部。大学一年生。漫画研究会部員。目立たない男

ケン 別荘で高宮三姉妹に使える大男

他に、不良女子学生二人。大学講師。受講中の大学生たち

1 大学のキャンパス

紺色のスーツにベージュのミニスカートの高宮亜季子が、テキストやノートの小脇に抱え、ひとり歩いている。少し離れた場所で彼女をじっと見つめる英介。

N (英介) 「高宮亜季子は僕らのクラスにとっては謎の存在だった」

2 同じ大学の教室

授業中。講師が黒板の前で講義している。高宮亜季子は三列目あたりの席でひとり座って熱心にノートをとっている。二列ばかり斜め後ろの席に英介ひとり。ぼんやりと亜季子の肩や耳たぶのあたりを眺めている。

N (英介) 「クラスの、いや全大学の男どもが彼女と知り合いになりたがっている。だが彼女は、コンパなどの催し物にはいっさい顔を出さず、放課後のおつきあひもまったくくない。出席率はほぼ一〇〇%、きちんと姿勢を正してノートをとり、授業が終わるとさっさと帰っていく」

後ろの扉がそろそろと開き、遅刻してきた彰一が忍び込み、さっと英介の隣に座る。ちらつと英介を見てウィンクし、親指をたて、同人漫画雑誌を開いて読みふける。

N (英介) 「こいつは彰一。ぼくの唯一のともだちだ」

彰一が開いた漫画雑誌のページに、清楚な令嬢（亜季子と同じような髪型・服装）が後ろ向きに犯されている場面が描かれている。英介、思わず漫画の女性と亜季子を見比べる。

3 挿入カット

漫画と同じように、亜季子を犯す英介の妄想

4 2と同じ

彰一、英介を見、それから亜季子、漫画雑誌を見比べてにやりと笑う。

彰一「よせよせ英介。しよせんおれらにや高嶺の花なんだから」

英介、妄想から覚める。

英介「るせえよ」

亜季子、ふと背後の英介たちをちらりと見やり、それから正面を向いて謎めいた微笑みを浮かべる。

〈タイトルクレジット、スタッフ、キャスト〉

5 漫画研究会部室

乱雑な狭い部室。そこらじゅうに漫画雑誌や単行本がちらばっている。二年生の井上が、ひとり突くに向かい、用紙に向かって鉛筆でラフを描いている。ドアが開いて三年生の安藤と矢代が入ってくる。

安藤「お、井上、また描いてるねえ……へええ美少女戦士ものか。おまえいつからロリコン漫画に転向したんだ？」

井上「こんどはいけるよ、部長……彼女、ネルヴァっていうんだよね。古代ギリシヤの女奴隷戦士。いま、霧の森をさまよって、悪い山賊につかまってレイプされちゃう……どうよ」

安藤「おまえ、そんな漫画、ジャンプの新人賞に出すんかよ」

井上「まっさか、こないだオフ会で行った飲み屋で、美少女コミックの編集長に会ったんだよね。名刺もらっちゃってさ、いい作品できたら載っけてくれるって。悪いけど、おれ、デビューしちゃうんだから」

矢代、無言で用紙を取り上げ、さっと眺め、何やら鉛筆で描き込む。

井上「ちょ、ちよつと矢代さん」

矢代「後ろから襲われて捕まるなんて、ベタな展開すんじゃないねえよ」

井上、用紙を見る。女戦士が山賊の仕掛けた罠にかかり、木の枝に宙づりになっている絵が描かれている。

安藤「ほく、なるほど、たしかにエロくなったな」

矢代、自分のイスに座り、無表情にノートパソコンを叩き始める。

矢代「美少女コミックの編集長、パンちらが好きだからよ。盛大に入れときな」

井上「はあ……ども」

三人、無言で自分の世界に没入する。井上は漫画を描き、矢代はパソコンのエロアニメサイトをサーフィンし、安藤は漫画雑誌を読みふける。

N（英介）「これが僕の先輩たちだ。漫画研究会と名前がついてるけど、何もせずに狭い部室に溜まつてるだけだ。三年生で部長を勤める安藤さんはまだ二十一歳だというのにもう額が禿げあがっている。副部長の矢代さんは無口で何を考えているのか分からないが、各地のコミケだとか、珍しいロリコン漫画を入手できる古本屋とか、なかなかの情報通で部長以上に敬意を払われている。プロの漫画家を目指しているのは二年生の井上さんだけ。これまで新人賞に二十回応募し、佳作にすら入ったことがない」

6 教室

授業が終わり、講師が外へ出てゆく。学生たち、立ち上がり、ノートをしまったり、おしゃべりをしたり、グループになって教室を出たりしている。

彰一、大あくび。英介は例によって高宮亜季子がひとりきりで教室を出るのを眺めている。

二人の男子学生が彼女に話しかけるが、亜季子、笑顔でお誘いを断り、出ていく。

彰一「部室でも行くかあ」

英介「うん」

彰一と英介、立ち上がり、帰り支度を始める。

N（英介）「今年漫研に入った新入生は、僕と彰一の二人。彰一はたった五人の部員のなかでは一番闊達な性格かもしれない。もつともクラスじゃ陰気で目立たない奴というレッテルを貼られているのは僕と同様だ……」

彰一と英介、教室のドアに向かう。

N（英介）「漫研が好きなのわけじゃないが……ほかに行き場はない」

7 教室の外の廊下

英介と彰一、廊下に出てくる。背後より「あのう」と声。振り向くと、そこに高宮亜季子が微笑んで立っている。彰一と英介、思わず周囲を見回し、確かめるように自分たちを指さす。

亜季子「いま、よろしいですか？」

彰一「え……ええ」

亜季子「みなさん、漫画研究会の方ですよね」

彰一「そうですけど」

亜季子「ああ、よかった！」

英介と彰一、顔を見合わせる。

8 漫画研究会部室

安藤、矢代、井上、英介、彰一。漫研部員たちが、机に置かれた一枚の紙片を囲んで、考え込んでいる。紙片には、パソコンで作ったらしい地図。山の中にある別荘地への案内図らしい。

彰一「で、夏休みに姉妹三人だけで過ごすから、ぜひ、みなさんをご招待したいって」

安藤「みなさんっておれら？」

彰一「ええ……なんせ凄い美人なんですよ、スレンダーで、でも胸が結構おおきくて……」

井上「見たんかよ、おまえ」

彰一「あ、いや……そういう噂なんすけど……」

井上「で、なんでそんな美人から、おれらにお誘いがかったわけ？」

彰一「なんでも妹さんが、すごい漫画マニアだから……」

安藤「別荘っていうくらいだから、お嬢さんなんだろ？ おれ、着てく服なんかねえよ」

彰一「ふだん着でいいって言っちゃったよ」

安藤「そういうこっちゃねえよ。分かってねえな、おめえ」

彰一「でも、俺、行くなって返事しちゃったんですよ」

安藤「えー！ そういう事、なんで一年坊主のおまえが決めるわけ？」

矢代「(ぼそりと) いいんじゃないねえの……。どうせ、みんな行くところなんかないんだろ」

一同沈黙。

9 山道を走るバン

道の右側は切り立った崖、左は鬱蒼とした樹海。バンを運転する井上。漫研部員たち黙って車に揺られている。助手席では、亜季子に渡された地図を片手に安藤がナビゲーター役をやっている。

N（英介）「結局、ぼくらはご招待を受けることにした。部員で車を持っているのは井上さんだけだ。安藤さんはなにを勘違いしたか、就職活動用のスーツにネクタイ。矢代さんは景色には目もくれず、ずっとノートパソコンを叩いている。東京を出発してから何時間たったろう……僕らはずっと深い樹海を突っ切る一本道を走っていた。まるで……異世界へと誘われるように……」

車内では井上と安藤が言い争っている。

井上「部長……道あつてんの？ おれら迷ったんじゃない？」

安藤「いや、そんなはずは……たしかにこの道のはずだよ」

井上「だったら着いてもいいころじゃん？ もうすぐ日が暮れちゃうよ」

安藤「うっせえよ。ちよつと待ってる」

安藤、道路交通図と亜季子の地図を必死に見比べている。

そのとき、右側の崖から大きな石が落ちてくる。

井上「あぶねえ！」

井上、必死でハンドルを切る。バンは百八十度回転して停車。

バンのすぐ鼻先に巨大な石が樹海に突っ込むように、道をふさいでいる。

漫研部員たち、バンを降りる。

井上「落石だ……。いきなり落ちてきやがった」

安藤「……俺はもう帰る。こんなとこやだ！ 誰だ、お誘いを受けようなんて言いだした奴は」

井上「帰りたくても帰れねえよ」

井上、バンを指さす。タイヤが一個外れ、ボンネットがひしゃげ、エンジンから白い煙がたちぼわっている。

安藤「じゃあ、どうすんだよ」

矢代「歩くしかねえだろ」

矢代、さっさと石を避けて進行方向に歩き始める。部員たち仕方なく、バンから荷物を取り出し、後を追う。しばらく歩くと別荘らしきものの影も見えない。背後より「あら！」と声。

部員たち振り向く。

高宮亜季子の妹、亜沙子が白いジョギングパンツにTシャツ姿、ここまで走ってきたという風情で立っている。

亜沙子「ひよっとして、漫画研究会の方々ですか？」

井上「あ、はい……」

亜沙子「やつぱり！ でも、いったい、どうしたんですか？ まさかここまで歩いてきたわけじゃないんでしょう？」

井上「えと（背後を指さし）落石で車をやられちゃって……歩いていこうと……」

亜沙子「あく、多いんですよねえ、このへん。お姉ちゃん、気を付けてって言ってませんでした？」

井上「あ……いや」

亜沙子「でもちようどよかった。私、帰るところだから、案内しますね」

亜沙子、走り出す。部員たち、ひいひい言いながら後を追う。

やがて、樹海の中に門柱が見える。門柱からさらに小道がつづき、その奥に瀟洒な別荘が建っている。部員たち、門柱から中に入るなり、精魂尽き果てて地面にしゃがみこむ。先を走っていた亜沙子が戻ってくる。

亜沙子「どうしたんですか？」

安藤「あ……歩いてもらえませんか」

亜沙子「くすくす笑って）じゃ、ここで待ってもらえます？」

亜沙子、別荘に向かって走り出す。部員たち、声も出さずしゃがみこんでいる。

ふと、人影が指す。顔をあげると、大男のケンが無表情に立っている。部員たち、思わず後ずさりする。ケン、無言で部員たちの荷物を拾い上げ、別荘に向かって歩き出す。部員たち、不安な面もちで彼の後に従う。

10 別荘の中。二階。漫研部員たちの寝室

ベッドが五つ、並んでいる。ケンが入ってきて荷物をおろす。部員たちをおずおずと中に入る。ケン、そのまま部屋を出ていく。

井上「(ベッドを数えて)ここが寝室ってことらしいな」

安藤「ったく。とんでもねえとこに来たよ」

井上「部長、まあ、そう言うなって。後で美人三姉妹にご対面できるんだから」

彰一「さっきのコ、かわいかったすねえ……」

井上「そーいや、おまえらと同じクラスの高宮亜季子ってのは、何番目なの」

彰一「二番目ですって。さっきのコは末の妹ですよ。このぶんじゃ長女も期待できますね」

安藤「やらしてくれるわけじゃあねえだろ」

部員たち、沈黙。井上はノートを取り出して風景をスケッチしはじめ、矢代はノートパソコンを接続しキーを叩き始める。安藤はベッドに寝ころび、やがて寝息をたてはじめる。彰一はベッドに座っている。英介はひとり、窓から外を見る。鬱蒼として広大な樹海が地平線の

向こうまで広がっている。庭にはプールまでついている。

N(英介)「言うまでもなく、ぼくらは全員、童貞だった。他人となるだけ関わりを持ちたくないぼくらが、恋人など作れるはずもない。高宮亜季子は、ぼくらを別荘に誘った理由をこう語った。大学のいろいろな人たちと交流を持つために、毎夏、別荘にさまざまなゲストを呼んでいる。彼女の妹は熱心な漫画マニアなので、今年の夏は漫画研究会のメンバーを招待したのだ、と」

11 別荘の一階の食堂

大きなテーブルに、ナイフやフォーク、ナプキン、グラスが人数分並べられている。先に座っている長女・亜衣子、次女・亜季子、三女・亜沙子。

亜衣子はシックなベージュのスーツスタイル。胸にあしらった蝶のアクセサリー。

亜季子は白いブラウスに黒のタイトスカート。アクセントにオレンジ色のリボン。

淡い花模様をあしらったワンピース。

白いシャツに蝶ネクタイ、ボーイスタイルのケンが、漫研部員たちを連れてやってくる。三姉妹は立ち上がり挨拶。

N（英介）「長女・亜衣子。二十三歳、大手商社の社長秘書。次女・亜季子。ぼくらと同じ大学一年生。そして三女・亜沙子。高校二年生だそうだ」

亜衣子「みなさん、お待たせしちゃってごめんなさいね。遠いところをよくいらっしやいました。今夜はくつろいで歓談しましょう」

部員たちはおずおずと立ったまま。

亜沙子「座ったら？……なんかへんだよ（くすくす笑う）」

亜衣子「亜沙子、失礼よ。（漫研部員たちに）どうかお掛けください」

英介、亜季子を見る。亜季子、微笑み返す。全員着席。ケンが入ってきて、全員のグラスにワインを注ぐ。英介のグラスに注ぐ番になる。英介、ケンを押しとどめる。

亜衣子「あら、お飲みにならないの？」

英介「ええ……飲めなくて」

亜衣子「（なぜか慌てたふうに）亜季子、そういうことはちゃんと事前にお聞きしておいてよ。ケン、何かソフトドリンクを」

ケン、戸惑ったように、三姉妹を見比べている。

亜沙子「ほら、早く！」

ケン、お辞儀をしてキッチンへ向かう。

亜沙子「ごめんね。あいつ、ちよっと足りなくてさあ」

亜衣子「（答めるように）亜沙子」

亜沙子「は〜い」

ケン、ジュースを持って戻ってきて、英介のグラスに注ぐ。

亜衣子「じゃ、乾杯しましょうか」

英介「あ、ちよっと待ってください」

英介、薬のビンを取り出し、錠剤を口に放り込む。

亜衣子「お薬？」

英介「ええ」

亜沙子「どこがお悪いの？」

英介「精神安定剤です……」

三姉妹、顔を見合わせる。

N（英介）「ぼくは食前には必ず精神安定剤を飲まねばならなかった。いじめられた経験もあり、不登校をくり返してきた僕は、なんとか薬のおかげで人並みの精神状態を保っていたのだ。そう、ぼくは変な奴だ。こんな場に呼ばれるべき人間じゃない。美しい三姉妹を前にしても、ぼくは鬱々として楽しめなかった」

乾杯に続き、次々と料理が運ばれてくる。部員たち、次々と自己紹介を始める。

N（英介）「話はずまなかった。自己紹介が終わると、みな口をつぐむばかりだった。料理が次々と運ばれたが、味なんか覚えていない。ただ一人、プロを指す井上さんだけが、三姉妹と

なんとかか会話をつづけられた」

井上、持参した自作の漫画を姉妹たちに見せる。

N（英介）「井上さんは、これまで新人賞に応募して落選した漫画を姉妹に披露した。彼女らはとても感じがいい。どう見たってへたくそな彼の漫画を面白がり、質問し、人を逸らさない。育ちのいいお嬢さんとは、こんなものかとぼくは見つめるしかなかった」

デザートになる。井上、矢代、安藤、彰一は、今にも眠りそうな表情を浮かべている。

亜季子「みなさん、お疲れのようね」

亜沙子「そりゃそうよ。沢ヶ森のほうから歩いてきたんだもん」

亜衣子「歩いて？」

井上「ええ……落石で、車をやられちゃったんです」

亜衣子「それは大変だわ。亜季子、すぐに修理の手配を」

亜季子「はい、お姉さま」

亜季子、食堂を出てゆく。

亜衣子「では、今夜はこれでお開きにしましょうか」

亜沙子「そうね。明日は楽しい余興もあるし」

井上「余興つすか……」

亜沙子「期待していいよお、ねえお姉さま」

井上「どんなことやるんです？」

亜衣子「それは明日のお楽しみ……一種の鬼ごっこみたいなものかしら」

井上「はあ……鬼ごっこ」

亜沙子「気を付けてね。私たち、とても強いのよ」

亜衣子「(立ち上がり)では、みなさん、ごゆっくりお休みになって。いい夢を」

漫研部員たち、口々に「ごちそうさま」「お休みなさい」と呟くように言いながら、食堂を出てゆく。

12 寝室の外の廊下

漫研部員たち、千鳥足で歩いている。ただひとり、英介だけがまともな状態で、倒れそうになる他の四人を支えたり、しゃがみこんだ彰一を起こしたりしている。向かい側から亜季子が歩いてくる。

亜季子「あら、もうお休み？」

英介「はい」

亜季子「遠かったでしょう？ ごめんなさいね。突然、お呼びしたりして、ご迷惑じゃなかった？」

英介「あ、いや」

英介以外の漫研部員たちは倒れ込むように、寝室に入ってゆく。廊下には、英介と亜季子ふたりきりとなる。亜季子、さっと右手を差し出す。

亜季子「これからも、長くおつきあいしましょうね」

英介「あ……はい」

英介、不器用に彼女と握手する。

亜季子「じゃ、また明日。お休みなさい」

亜季子、去る。英介、しばらく見送り、寝室に入る。

13 二階の寝室

英介以外の漫研部員たち、死んだように昏々と眠っている。英介ひとり、ベッドに腰をおろし、窓の外の月を眺めている。

N（英介）「なんか変だ……。みな、眠り薬か何かを吞まされたかのように、揃って眠りこんでいる……。なぜぼく一人眠くないんだ……？ ぼくだけはワインは飲まなかった。だが、代わりに出されたジュースは変な味がしたような気がする……。ぼくが酒を飲めないとわかったときの彼女たちの慌てようは……」

英介、立ち上がり、廊下に出る。

14 寝室の外の廊下

英介、暗い廊下をひとり歩いている。

N（英介）「そもそも、ここに呼ばれたことだって、冷静に考えれば変だ。口をきいたこともない男五人を、なんの警戒もなく家に入れたりするだろうか……。それにあの落石……。亜沙子はぼくらと同じ道を走ってきて追いついたはずだ。なぜ落石のことを知らなかったんだ？」

英介、暗い廊下の突き当たりの階段を降りる。

15 一階の食堂

英介、食堂にひとり立っている。電気はついていない。

N（英介）「三姉妹はもう寝たのだろうか……。一階にも二階にも、ひとの気配がない。誰もいないかのように静まりかえっている。変だ……。まだ八時を少し回っただけだ。寝てしまうには早すぎる。……。明日の鬼ごっこ……。亜沙子が言っていた、私たち、強いとはどういう意味なんだろう……。……」

英介、ふと、地下室に通じる階段を見つめる。思い切って降りてみると、降りきったところにドアが閉まっている。英介、そっとドアノブに手をかけ、なかを覗き、驚く。

16 地下室

地下室は広大なジムになっている。マットが敷かれている。

マットの上で、スポーツウェア姿の亜衣子と亜沙子が、競泳用のパンツ姿のケンを取り囲んでいる。

ケンの肌のそこかしこに赤い痣。苦しげな表情で顔を歪め、肩で息をしている。

亜衣子「ほら、どうしたの？ かかって来なさい！」

亜沙子「こっちだよ、こっち！」

ケン、うなり声をあげ、亜衣子にとびかかる。亜衣子、ケンの腹部に見事な蹴りを入れる。

ケンよろめき、亜沙子に倒れかかる。亜沙子、その股間に膝蹴りを浴びせる。ケン、絶叫し、マットの上で両手で股間を押さえて悶絶する。

亜衣子、ケンの首を太股で締め付ける。ケン、しばし悶絶しているが、やがてぐったりとなる。

亜衣子「今日はこのくらいにしとこっか」

亜沙子「そうね、明日は、いよいよ本番だもんね」

二人、顔を見合わせてくっくつと笑う。亜衣子、仰向けに倒れて動けないケンの傍らにしゃがみこみ、競泳用のパンツをずりおろす。ペニスを右手で握り、優しく上下にしごきはじめる。ペニスが勃起しはじめる。

亜衣子「ふふふ……ここだけは元気よね」

亜衣子、亜沙子、二人でケンのペニスを嘗めはじめる。ケン、苦痛と快楽のまじった表情で悶える。

17 ジムの扉の外

英介、ジムの内部で繰り広げられる異様な光景に眼を奪われている。

18 地下室

亜衣子はケンのペニスに跨り、騎乗位でケンを犯し始める。亜沙子はケンの顔にまたがり、ケンに女陰を嘗めさせながら、姉と抱き合い、たがいの体を探り合う。

19 ジムの扉の外

英介、思わず自慰を始める。

ふと背後に人影。英介、振り返ると同時に手刀で頭部をしたたかに打たれ、気絶する。

亜季子が倒れた英介を見下ろして立っている。

20 樹海の中

正午近い真昼。

ヘヴィメタルが大音響で鳴り響いている。

英介は上半身裸、下半身はびつちりした黒いナイロンのスパッツ、それにスニーカーという出で立ちで地面に仰向けに転がっている。

不快な音楽に、英介、目を覚ます。昨夜殴られた後頭部のあたりを痛そうにさすり、ハツとして周囲を見回す。人影はない。樹木の茂みにスピーカーが備えつけられていて、音楽はそこから流れてきている。

スピーカーの声（亜沙子）「お目覚めになりましたか？」

英介、ぎよっとして立ち上がり、周囲を見回す。誰もいない。

スピーカーの声（亜沙子）「さあ、いよいよ楽しい余興の開始です。今日の余興は鬼ごっこ。ルールは簡単よ。私たち三人が鬼になるから、漫画研究会の皆さんは、一生懸命逃げ回ってね。隠れてもかまいませんけど、見つかったらこわあい鬼に食べられちゃうかもよ！ ではルールを説明します。そろそろ正午。これから二十四時間、私たちから逃げきれればあなたたちの勝ち、無事に帰してさしあげます。もし見つかったら、私たちと戦って勝てればいいんです。あなたたちと同様、私たちも素手です。フェアに勝負しましょう。でも気をつけて。私たち、とっても強いんだよ。無事に生きてここから出られたら、めっけもの。私たちと勝負して勝った男はいなか

ったんだからね！ なお、ゲームは私たちの別荘の周囲五キロ四方のなかで行われます。その範囲を越えて移動してはいけません。外とは高压電流が流れる有刺鉄線で仕切られていますから、触れれば感電死は間違いないし。では、いよいよスタートですよ。10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！」

スピーカーからジャジャーン！ と大音響が炸裂し、急に静寂が訪れる。

N（英介）「事態を理解するのに数分かかった。要するに、人間狩りだ。ぼくらはゲストではない。人間狩りの標的、ハンターに追われる動物として招待されたのだ」

21 英介の回想

高校の裏手。不良少女二人に絡まれる英介。往復ビンタを浴び、股間を蹴り上げられ、泣きながらお金を差し出す英介。少女二人がツバをはきかけて去った後も、泣きじゃくっている。

22 20と同じ

英介、頭を抱えてしゃがみこんでいる。

N（英介）「ぼくは喧嘩に買ったことがない。女の子相手にもだ」

背後でガサツと音。英介、飛び上がるように立ち上がり、わめきながら走り出す。

23 樹の間を縫って走る英介

英介、何かにつまづいて倒れる。

英介「ひいっ！」

うつ伏せになったまま、ガタガタ震えている。
何者かが走ってくる音。

英介、ハッと起き上がり周囲を見回す。草の茂みに身を隠す。
井上の声が聞こえてくる。

井上の声「ねえ……よしてくださいよ……冗談きついよ……」

英介「……井上さんだ……」

井上の声「ね、冗談なんでしょ……よせ……やばいよ、これ……おい、やめろ！ やめろ！ うっ！ ぐえ！ ぎあぁ！」

井上の悲鳴とともに、鋭い打撲音が何度も続く。

英介、耳を覆って目をぎゅつと瞑る。

井上の声「ぎゃー……！！！」

井上の絶叫が響き、静かになる。足音が静かに去っていく。

英介、しばし耳を塞いでいるが、やがて顔をあげ、おそるおそる、草の茂みから出てくる。

井上がうつぶせに倒れている。英介と同様、黒いスパッツひとつ。英介、井上に近づき、体をそっとゆさぶる。動かない。仰向けにする。

井上の顔は真っ赤に腫れあがり、鼻血が垂れ、腕は奇妙な形に曲がっている。

英介「……い、井上さん……」

井上、かすかに目を開け、閉じる。ふと、井上のスパッツの裾から血が流れているのに気づく。腹部にも血が溢れている。

ふと英介、足音に気づく。木々の間から、少し離れた場所をゆっくりと亜季子が歩いているのが見える。

黒いスポーツブラ、ミリタリー風の短パン、膝にサポーター、ブーツといったセクシーな戦闘服スタイル。

亜季子は顔に飛び散った返り血をゆっくりと拭いながら歩き去る。

英介「う……」

英介、嘔吐する。それから立ち上がり、悲鳴をあげて走り去る。

24 樹海の別の場所

樹の間を走る英介。やがて息切れし、ぼったりと倒れこむ。しばらく息をついていると、遠くから、「ぎゃっ！」と悲鳴があがる。

英介、おそろおそろ、樹に身を隠しながら、悲鳴のほうをのぞきこむ。

亜季子と同様のコスチュームの三女の亜沙子と、安藤が対峙している。黒いスパッツひとつの安藤は片手で痛そうに股間を押さえ、片手を必死に振り回している。

亜沙子「もう降参なの？」

安藤「こ、降参します」

亜沙子「このゲームには降参ってルールはないの。やるか、やられるか、それだけ」

亜沙子、安藤を嘲笑しながらその周囲を歩き回る。

亜沙子「どうしたの？ 立派な大学生が可憐な女子高生にかなわないってか？」

亜沙子、安藤の顔を蹴る。安藤、鼻を押さえて仰向けに倒れる。亜沙子、その腹部にまたがり、さんさんに安藤の顔を殴る。

亜沙子「この豚！ オタク！」

英介、悲痛な顔でそれを見ているが、ふと足元に太い木の枝が落ちているのにきづく。意を決してそれを拾い上げて立ち上がり、亜沙子の背後からそっと近づく。

亜沙子は立ち上がり、転げ回る安藤の腹部を蹴り続けている。

英介、木の枝を振り上げる。その瞬間、亜沙子が回れ右をしてこちらを向く。

亜沙子「邪魔すんな！」

亜沙子、英介の股間を蹴りあげる。英介、呻き、股間を両手で押さえて倒れ、悶絶。

亜沙子「あんたが覗いてたことくらい、分かってたんだよ！」

亜沙子、うつ伏せの安藤の髪のをつかんで無理やり立たせ、木の幹に押しつける。

亜沙子「そろそろフィニッシュといきますか」

亜沙子、四度つづけて安藤の股間に膝蹴り。安藤、血反吐をはき、うつぶせにくずおれる。その股間から、血が流れ出て地面に血溜まりをつくる。

亜沙子、英介の方を見る。英介、怯える。

英介「く、来るな！」

亜沙子「(笑って)一度に倒す相手は一人だけと決まってるの。じゃないと、あつという間にゲームが終わっちゃうからね」

亜沙子、地面に置いてあつた水筒を拾い上げ、飲む。

亜沙子「あ、すっきりした。金玉狙えばどんな男も、こんなもんよね。(英介を見て)なにやってるの、はやく逃げなよ」

英介「え……？」

亜沙子「あ、タマタマが痛くて立てないんだ。じゃ、私いくね。後で潰してあげるから、楽しみにしててね」

亜沙子、去る。英介、しばし呆然としゃがんでいるが、地面に転がった安藤の血まみれの股間を見て、恐怖にかられ走り去る。

25 樹海の別の場所

湧き水がわいている。英介、走ってきて、よろめきながら湧き水に口をつけ、ごくごく飲む。

たっぷり飲んで顔をあげる。背後に人影。英介、悲鳴をあげて立ち上がり、相手を突き飛ばそうとして腕をつかまれる。

英介「放せ！ 放せよ！」

彰一「なにやってんだ。英介、おれだよ！」

彰一が、やはりスパッツひとつで立っている。

彰一「どくしたんだよ？」

英介「彰一……生きてたのか？」

彰一「ああん？ いったいどうしたんだよお、おれら。昨夜は急に眠くなるし、目が覚めたらこんなカッコでこんなとこに寝てるしよ」

25 同じ場所。10分ほど経過

湧き水に並んで腰をおろした彰一と英介。

彰一「……ほんとうかよ……井上さんも……安藤さんも」

英介「ほんとうだ……二人ともボコボコにされた挙げ句、玉潰された」

彰一「ひっ（無意識のうちに両手で股間を庇う）。で、でも、まさか、あの姉妹が……」

英介「安藤さんが亜沙子って三女にやられるのをこの目で見た。おれも、亜沙子に蹴られた……とてもじゃないが、かないっこない」

彰一「じ、冗談じゃねえよ。おい、どうすんだよ。なんとかならねえのかよ」

英介「……………」

彰一「いやだ！ 金玉、潰されるのはいやだ！ 助けてくれえ！」

英介「ほか、わめくな。見つかるだろうが」

彰一「だってよお」

英介、彰一に平手打ちを喰わせる。彰一、しばし呆然としている。

英介「落ちつけ！」

彰一、しくしく泣き出す。

N（英介）「不思議なことに、ぼくは落ちついていて。一日に三度食前に飲まねばならない精神安定剤は、もちろん持っていないかったのだが、恐怖が神経を麻痺させているのだろうか。とにかくあと二十何時間、逃げ延びねばならない。それにはまず水が必要だ」

英介、周囲を見回す。少し離れたところに竹藪。英介、竹藪に向かって歩きだす。

彰一「おい……どこ行くんだよ」

英介「待ってろ」

26 同じ。10分ほど経過

英介と彰一、石で竹を切り、節に穴をあけて竹筒をつくっている。それに湧き水を入れる。

彰一「で、どうするんだよ」

英介「いくぞ」

彰一「いくぞってどこに？」

英介「とにかくここを離れる」

英介、近くの木の枝を折り、両手に持って歩き出す。

彰一「けどよお……」

英介「いいか。水のある場所なんて、五キロ四方にここしかないと思ったほうがいい。当然、あいつらもマークしてるはずだ。ここでじっとしてるのはやばい。暗くなるまで移動をつづけよう」

彰一「かえってあいつらと鉢合わせしやしねえか」

英介「あいつら、一人ずつ行動してるらしい。だから鉢合わせしても二対一だ。そうしたら戦うしかねえよ。強いつたって女だ。こっちは二人、なんとかなるさ」

27 樹海の別の場所

英介と彰一が歩いている。彰一、へばって座り込む。英介、叱咤するが、彰一、首を振って

ダダをこねる。

N (英介)「彰一は恐怖からか、すごくわがままだった。安藤さんがボコられた現場を見ている
ぼくのほうがかえって落ちついてた」

英介、仕方なく彰一と並んで座る。彰一、竹筒から水を飲む。英介、「あんまり飲むなよ。
なくなっちゃうぞ」と注意する。

28 樹海の別の場所

英介、彰一、歩いている。

英介「彰一、だいぶ日が落ちたぜ」

彰一「……そうだな」

英介「もう少しの辛抱だ。がんばろうぜ」

彰一、竹筒から水を飲むとして、なくなっているのに気づき、地面に叩きつける。英介、

その竹筒を広い、彰一に渡す。

英介「他に水のある場所があるかもしれないじゃねえか」

彰一「うっせえ！」

英介「彰一、大声出すなよ」

彰一「だいたい、なんだよ、さつきから指図ばっかしやがって！ なにさまのつもりだよ！」

英介「彰一、よせ」

彰一「おれはもう、ここ動かねえぞ！ ああ、動くもんか」

英介「ばか！」

英介、彰一を殴る。

彰一「英介……や、やめろよ」

英介「さつきから聞いてりや、文句ばっか一人前じゃねえか。だいたいよ、お前が亜季子から招待されたとき、嬉しそうにホイホイいきますなんて勝手に返事なんかするから、こんな羽目になっちまったんじゃないやねえか。もう知るか、勝手にしろ！」

英介、スタスタ歩きます。彰一、慌てて後を追う。

N (英介)「ひとを怒鳴るのは初めてだった。ひとを殴るのも初めてだった。ひとを仕切るのも初めてだ……。どうしたんだろう、自分でも信じられないくらい、ぼくは冷静だった。彰一を怒鳴ったときも、彰一を殴ったときも、冷静だった」

29 樹海の別の場所

英介と彰一、歩いている。彰一、ふと足をとめる。

英介「またかよ」

彰一「違うんだ、あれ見ろよ」

樹々の間から、凹地が見える。凹地に、樹の幹に背中をもたせかけて座り、目をつぶっている矢代。

彰一「矢代さんだ」

彰一、ふらふらとそちらに歩み寄ろうとする。英介、彰一を制止する。

英介「まで……」

矢代がもたれた樹の反対側に、ツタでつくったワツカが落ちているのに気づく。矢代は右手で、樹の梢から垂れ下がるツタを握っている。

英介「ちよつと静かにしてろ。音をたてるなよ」

足音が聞こえる。長女・亜衣子が歩いてくる。ワツカに足がひっかかる。矢代、握ったツタを思い切り引つ張る。亜衣子の足首のワツカがきゅつと締まり、彼女は逆さ釣りに樹にぶら下げられる。

彰一「やった……」

彰一、腰を浮かすが、英介、制止する。

矢代、ゆっくりと亜衣子に近づく。

亜衣子、憎々しげに矢代の顔にツバをはきかける。矢代、頬にかかったツバを拭い、亜衣子の乳房を殴りつける。亜衣子、悲鳴をあげ呻き、ぶらさがったまま悶絶する。

矢代、無表情に苦悶する亜衣子を見つめているが、樹の根元に置いてあった木製のナイフを拾い上げ、いきなりツタを切る。亜衣子、どさつと地面に落ちる。矢代、彼女を仰向けにし、腹部にまたがり、喉元にナイフをつきつける。

亜衣子「殺す気？」

矢代「死ぬよりひどい目にあわせてやる」

矢代、左手で亜衣子の短パンツをずりおろす。亜衣子、無抵抗。

亜衣子「(微笑んで) 私としたいの？」

矢代、無言で亜衣子の頬を殴る。亜衣子、一瞬ひるむが、すぐに矢代をにらみつける。

亜衣子「やれるもんなら、やってみなさいよ。童貞！」

矢代「黙れ！」

亜衣子「オタク！」

矢代「黙れ！」

矢代、また亜衣子を殴る。亜衣子の口から血が流れる。

矢代「謝れ！」

亜衣子「何をよ！」

矢代「俺を侮辱したことを謝れ」

亜衣子「ふん、クズのくせにプライドだけは一人前なのね」

矢代「おれはクズじゃない！」

矢代、亜衣子を殴る。亜衣子、失神する。矢代、しばらく涙を流して亜衣子を見下ろしているが、やがて無表情になり、亜衣子の膝にひっかかっていた短パンツを脱がせる。それから荒々しく呼吸しながら自分のスパッツを脱ぎ、勃起したペニスを握りしめ、亜衣子の股間にあてがう。

矢代「うっ！」

矢代、射精する。精液が、亜衣子の股間に近い地面にしたたる。矢代、呆然とペニスを握りしめたまま動かない。

亜衣子、薄目をあける。笑いが広がる。

亜衣子「やっぱり……」

矢代、ぎよっとして身を引く。亜衣子、寝たまま、左手で矢代の睾丸をぎゅっと握ってひねりあげる。矢代、絶叫。亜衣子、右手で拳を固め、矢代の鼻柱を殴りつける。矢代、仰向けに倒れる。

亜衣子、立ち上がり、矢代をさんざん蹴りつける。

亜衣子「この豚！ クズ！ 私をレイプしようなんて、百万年早いんだよ！」

彰一、そわそわして腰を浮かす。

彰一「助けなきや……」

英介「そうだな……いくか……」

彰一「ああ……」

二人、手にもった木の枝を握りしめているが、彰一、意を決して立ち上がり、わああああとわめきながら飛び出して、亜衣子に襲いかかる。

亜衣子、すかさず、彰一の股間にバックキック。

彰一、うめいて倒れる。

英介、足がすくむ。

亜衣子、動けない矢代に近寄り、耳元でささやく。

亜衣子「死ぬよりひどい目にあわせてあげる」

亜衣子、樹から垂れ下がったツタに、切断されたツタを結び付け、ワッカを矢代の足首にまきつけ、ツタを引っ張る。矢代、宙づりになる。

亜衣子、彰一が取り落とした木の枝を拾い上げ、剣道の素振りよろしく、矢代の股間に叩きつける。矢代、激しく痙攣し、動かなくなる。

彰一、這いながら逃げようとする。亜衣子、それに気づき、彰一の首に馬乗りになり、太股でしめつける。彰一、苦しげにもがく。

亜衣子、太股をねじって彰一を仰向けに倒し、顔にまたがり、両手で彼の睾丸をつかんでひねり潰す。彰一、激しく痙攣し、血反吐をはいて動かなくなる。

英介「(つぶやく) ばかな……ルール違反じゃ……」

亜衣子、しばし肩で息をしながら舌打ちし、いまましそうに首を振りながら、歩み去る。

英介、ひとり動けずにいる。

N (英介)「ぼくは一人になった。五人のなかでいちばん頼れそうな矢代さんもやられてしまった。三対一。勝ち目はない」

英介、矢代のぶらさがった場所まで近寄り、足元の木製ナイフを拾い上げる。

31 夜。漆黒の闇に覆われた樹海

英介、木製のナイフをお守りのように抱え、身じろぎもせずにいる。うつらうつらと眠りはじめる。

32 英介の夢。21のリプレイ

33 31と同じ

眠っていた英介、わめく。

英介「いやだ！」

英介、目をさます。

頭をかかえ、しばし俯いているが、やがて立ち上がる。イライラと狂ったように歩き回ったり、うめいたり、体を折り曲げたりする。それから、足早に歩きはじめる。

34 樹海の別の場所

歩く英介。時折立ち止まり、樹の幹にもたれて頭をかきむしったりしているが、ついに地面に倒れる。

荒く肩で息をしているが、やがて顔をあげる。ずっと落ちついた表情。ゆっくりと起き上がり、地面に座り込む。しだいに呼吸が整ってくる。

英介、ふと、樹の間から淡く光が漏れているのに気づく。立ち上がり、その光に近寄る。樹と樹の間から、別荘の黒々とした建物が見える。

英介、しばし考えているが、別荘に向かって歩きだす。

N (英介)「賭だった。別荘には三姉妹が帰っているかもしれない。彼女らがいなくても、あのケンという大男は残っているはずだ。だが、別荘に近いということは、道路にも近いということだ。道路に辿りつけさえすれば、活路が開けるかもしれない。なによりも、暗黒の樹海のなかに一人ぼっちでいるのは嫌だった」

35 樹海と別荘の敷地を仕切るフェンス

英介、フェンスに辿り着く。しばしフェンスに見入り、それから高圧電流が流れていないかどうか確かめるために、足下の木ぎれを投げつける。木ぎれは何事もなく地面に落ちる。英介、フェンスに近づく。フェンスの向こう側は別荘のプール。デッキチェアに黒の水着姿の亜季子が寝そべり、空っぽのグラスを手で弄んでいる。

英介、息を呑んで亜季子を見つめる。

建物からケンが盆に乗せたグラスを運んでくる。亜季子、グラスを受け取り、軽くケンに微笑み、それからいきなり、彼のみぞおちにパンチを食わせる。ケン、腹部を抱えて体を折り曲げる。亜季子、立ち上がり、苦悶するケンをデッキチェアに押し倒す。それから、ズボンのファスナーをおろし、手を突っ込む。

亜季子「……おおきくなってる……ケンは痛いのが好きなんだよね……気持ちいいのも好きだよね」

亜季子、フェラチオを始める。

フェンスごしに覗いていた英介、思わず自分の股間を手でまさぐる。

亜季子のフェラチオに、ケンは悶え、やがて射精する。

亜季子、ケンの精液を飲み干し、それから睾丸にパンチ。ケン、絶叫してのけぞる。だが、

そのペニスはまだ勃起している。

亜季子「変なの……ここを虐められるとかえって勃起するペニスってあるのよね……不思議」

亜季子、騎乗位でケンを犯し始める。

ケン、野獣のように下から亜季子を突き上げ、つづいて駆弁スタイルで犯す。

つづいて後背位。最後は正常位でフィニッシュ。

ケン、失神した亜季子に、水着を着せ、建物に入ってゆく。

フェンスの向こうの英介もまた、射精して肩で息をしている。

英介、しばし呼吸を整え、プールを見る。

亜季子はデッキチェアの上で失神している。

英介、立ち上がる。

36 プールサイド

亜季子、目を覚まして身じろぎする。その頸動脈のあたりに木製のナイフ。

彼女に後ろに英介がいて、ナイフを押し当てている。

英介「動くな」

英介、軽くナイフを引く、亜季子、びくりとする。
首筋に血がすつと垂れる。

亜季子「(舌打ちして) どうしようというの?」

英介「妙な真似をすると、今度は動脈を切る」

亜季子「わかってるわよ……で、どうしろというの?」

英介「立て。ゆっくりとだ」

亜季子は立ち上がった。

英介「水着のブラを外して、こっちによこせ」

亜季子、ため息をつき、後ろ手に手を回しブラの紐を外し、背後の英介に渡す。

英介「手を後ろに回して、手首を合わせろ。動くな」

英介、ナイフを突きつけたまま、左手でなんとか彼女の両手を縛る。

亜季子「なかなか、やるじゃない。でも残念ね。ほんとは私のおっぱい、見たいんでしょ。見せてあげようか?」

英介「その手は食わないよ。それにさっき、もっと刺激的な場面も見せてもらったしな」

亜季子「最低ね……」

英介「どつちがだ。さ、歩け。ゆっくりとだ」

亜季子「どこへ?」

英介「おまえの車のキーのある場所だ」

37 別荘の二階の亜季子の部屋

白いデスクに本棚。ベッド。家具は機能的なものばかりで女の子らしい装飾はない。英介、亜季子の首にナイフを押しつけたまま、入ってくる。

英介「キーはどこだ」

亜季子「デスクの一番上の引出しのなかよ」

英介「取れ」

亜季子「はい、はい」

亜季子、デスクに近づき、いきなりかがみこむ。ナイフがわずかに逸れる。

次の瞬間、亜季子は右脚を後ろにはね上げ、踵を英介の股間に命中させる。だが、英介、身じろぎもせず、左手で彼女の首を絞める。亜季子、何度も後ろ蹴りで英介の股間を狙うが、効果がない。英介、彼女の首を絞めたまま、彼女の額をデスクに打ち付ける。

亜季子「うっ」

亜季子、呻く。英介、もう一度、彼女の額をデスクに打ち付ける。亜季子、昏倒する。

英介、引き出しを探る。鍵束。英介、鍵束を見つける。

亜季子が呻き声をあげ、意識を半ば取り戻す。英介、彼女の首筋にナイフを当てる。

英介「車のところまで案内しろ」

亜季子「股間になにか詰めてるのね……」

英介「木の皮や草をね」

亜季子「かゆくない？」

英介「余計なお世話だ。立て」

亜季子、なんとか立ち上がり、ドアに向かって歩き出す。

その瞬間、ドアが開く。ケンが立っている。

英介「動くな！」

ケン、びくりとして硬直する。

英介「(亜季子に囁く) あいつの股間を蹴れ」

亜季子「え」

英介「慣れてんだろ？ ちゃんと気絶させろ」

英介、亜季子を促し、ケンに近づく。

至近距離まで近づく。亜季子、ケンの股間を蹴り上げる。ケン、うめいて床に倒れる。その瞬間、英介、亜季子の後頭部を殴る。亜季子、床にしゃがみこむ。英介、ケンに走り寄り、頭部や脇腹をさんざんに蹴る。ケン、わめきながら立ち上がり、逆襲。英介、壁に押しつけられるが、頭突きを食わせる。ケン、よろめく。英介、亜季子のイスを振り上げ、ケンの頭部にうち下ろす。ケン、倒れる。英介、何度も何度もイスをうち下ろし、返り血を浴びる。ケン、動かなくなる。亜季子、意識を取り戻す。血まみれで倒れているケンに気づき、駆け寄る。

亜季子「ケン！」

英介、亜季子の背後からナイフをつきつける。

英介「さ、車のところまで案内しろ！」

38 ガレージ

シャッターがあがる。広々としたガレージにびかびかの外車が三台並んでいる。英介と亜季

子、入ってくる。

英介「どれだ」

亜季子「(顎で示す) 真ん中の」

英介「最後に聞くけど……なんであんな真似をしたんだ」

亜季子「あんなって……」

英介「俺たちをここに招待し、睡眠薬を飲ませた」

亜季子「あんただけ効かなかったけどね……」

英介「精神安定剤に解毒作用があるとは思わなかったよ……なぜ、人間狩りなんかやるんだ？なぜ俺たちがそのターゲットになったんだ？」

亜季子「スリルを味わいたいだけよ……標的は誰でもよかったの」

英介「……誰でもよかった、だと？」

亜季子「ええ」

英介「……この雌豚！」

英介、亜季子の後頭部を殴る。亜季子、失神して地面にくずおれる。

英介「おまえら絶対に許さねえ……」

英介、亜季子の車に乗り込み、エンジンをかける。車が発進する。

39 別荘の門の近く

敷地内から英介が運転する亜季子の車が走ってくる。英介、息を弾ませ、開放された喜びに包まれた表情。

だが、いきなり後部のウィンドウが音をたててヒビが入る。

英介、振り向き愕然。

亜季子が、後部トランクにはい上がり、ウィンドウに石を打ち付けて破ろうとしている。

英介、悲鳴をあげ、思わずハンドルを切る。

車、門柱に激突し、停車する。

英介、車から飛び出す。

目の前に亜季子がすつくと立っている。

亜季子「逃げられるとも思ってるの！」

英介「……………」

英介は一度解放感をあじわってしまったぶん、戦意を喪失している。

亜季子、英介にとびかかる。まっさきに彼のスパッツから木の皮や草で作ったサポーターを抜き取り、股間に膝蹴り。

英介、ほぼ無抵抗に殴られ蹴られる。

亜季子は勝ち誇ったように英介をいたぶりつつける。

N (英介)「なぜだろう……彼女にさんざんに蹴られ、殴られ、嘲笑を浴びながら、苦痛は快感に、屈辱感は不思議な恍惚に変わっていった。このまま彼女にいたづられつつけたい、そんな思いが確かにぼくを包んでいたのだ」

英介、息もたえだえに仰向けに倒れている。

亜季子、悠然と彼を見下ろす。

亜季子「もう逃がさないよ……これで最後！」

亜季子、英介の股間を踏みつけ、ふみにじる。英介、絶叫し、激しく痙攣する。

亜季子、英介の睾丸を踏みつけた踵に全体重を乗せる。

英介の絶叫が咆吼に変わる。

激痛のなかで必死に体を起こし、両手で彼女の足首をつかみ、睾丸から引き剥がす。

亜季子、バランスを崩し、仰向けに尻餅をつく。

英介、立ち上がり、彼女の股間を蹴る。

亜季子、両手で股間を押さえ、身もだえる。

英介、亜季子にのしかかり、顔を殴る。

亜季子、動かなくなる。

英介、しばし亜季子を見下ろしているが、そつと乳房に触る。それから急に情欲にとりつかれたように、彼女の水着のパンツを脱がせ、陰部に手を手を差し込む。確かめるように指を動かす。

亜季子、びくりと動く。英介、右手で陰部をまさぐりながら、亜季子の乳首を吸う。

亜季子、意識を失ったまま身もたえする。英介、顔をあげ、驚いたように亜季子の顔を見る。

亜季子、無意識のまま、英介の頭を抱え、自分の胸に押しつける。

英介、亜季子の乳房に顔を埋めたまま、スパッツを脱ぐ。亜季子の股を広げさせ、ペニスを挿入し、動かし始める。

亜季子、あえぎ、身をくねらせるが、やがて意識を取り戻す。愕然とした表情。英介を押し戻そうとするが、英介、彼女の両手を押さえつけ、強引に犯し始める。

亜季子「やめて！……やだ！ やめて！」

英介「男を嘗めんじゃねえ！」

英介、亜季子の頬に平手打ちを食わせる。亜季子、涙を流す。

亜季子「お願い……お願いだから」

英介、聞く耳を持たない。亜季子、ようやく手をふりほどき、英介の首を両手でつかみ、絞め始める。英介、首を絞めさせたまま、犯し続ける。

亜季子、しだいに両手の力が抜け、やがて英介の肩にしがみつき、自分から腰を動かし始める。

延々と野獣の絡み合うようなセックスがつづく。英介、彼女を前から後ろから犯し、最後に彼女の口の中に射精する。

英介、立ち上がる。

亜季子は仰向けに寝そべったまま失神している。
英介、スパッツをはき、ふらふらと門柱に衝突した車に乗り込む。
エンジンをかける。が、かかからない。
英介、絶望したようにハンドルに額を押しつけ、目をつぶるが、ふと何か思いついたように顔をあげる。

英介「逃げ帰って……なんになるっていうんだ……」

英介、車を出る。寝そべったままの亜季子に歩み寄り、彼女を見下ろす。
亜季子は失神したまま。

英介「時間切れまで、つきあうよ」

英介、歩き去る。

N (英介)「ぼくは……生き延びた」

40 樹海の中

すでに太陽は中天に昇っている。

英介、木の根元に座り込み、半ば意識を失っている。

亜衣子、亜季子、亜沙子の三姉妹が近寄ってくる。

亜沙子、腕時計を見る。すでに十二時二十分。

亜沙子「残念。ゲームオーバー」

41 別荘のガレージのそば。一週間後

英介が掃除している。

N (英介)「一週間がたった」

42 亜衣子の職場

社長秘書として働く亜衣子の姿が一瞬映る。

N (英介) 「長女の亜衣子は一足早く、東京に戻り、職場に復帰した」

43 テニスコート

テニスの練習中の亜沙子が一瞬映る。

N (英介) 「三女の亜沙子は、蓼科高原で、高校のテニス部の合宿中」

44 41に同じ

亜季子が歩いてくる。その後ろに荷物を抱えたケン。

N (英介) 「次女の亜季子は、今日、東京に行く。新しい人間狩りの標的を物色しにゆくのだ。次のゲームはさ来週の終末だそうだ」

亜季子、挨拶代わりに、英介の股間にパンチ。英介、うめくが、嬉しそうに亜季子を見る。

亜季子、その頬にキスし、車に乗り込む。

車が走り去る。英介とケン、並んでお辞儀し、それから仲良く離しながら歩き去る。

N (英介) 「ぼくはやっと、居場所を見つけたような気分だ」

(おわり)